
Great Adventure

かたな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Great Adventure

【Nコード】

N18610

【作者名】

かたな

【あらすじ】

ある日まで彼女は普通の生活をしているつもりだった。普通に彼氏もいて、普通の職業についているはずだった。彼女の住んでいる世界には、10ほどの地帯が存在する。

～挑戦～

XXXX8年12月9日～火山地帯～

「おい、まだ原爆の用意はできないのか？」

隊長の叫びが聞こえる。

隊員の1人が叫ぶ。

「まだです。あと8分かかります！」

と、その声の直後、

「うわあああああ」

という声が聞こえた。

「大丈夫か??」

という隊長の声はもはや隊員に聞こえていなかった。

ズシン。ズシンと大きな音が聞こえてくる。

その音の主に隊長は殺された。

2カ月後

「正体不明の生物に火山調査隊全滅」

そのニュースが発信され、世界は混乱に陥った。

株価暴落、暴力事件…数え切れない出来事があった。

その「ある日」彼女…Itxaropenaは会社の社長室に彼氏とともにいた。

「あの事件以来、今まで築き上げて来た信頼が水の泡となった。」

社長が言う。

「やはり…」彼「Macross」はそうだったが、彼女には理解できなかった。

Itxaropenaの会社「Drip」は医療器具や薬品の会社だ。

彼女「Itxaropena（バスク語で希望）」は子供の頃原因不明の病気に罹り、この会社の点滴にお世話になった。

そのことから子どもの頃からこの会社に就職して人を助けたいという夢を持ち、かなえたのだ。

「Itxaropenaは理解できていないようだな。説明してやれ。」

彼が私に説明してくれた。

「Itxaropena、君が子どもの頃に原因不明の病気にかかったことは知っている。」

話していないのに…なんで知っているの？彼女は思った。

「私だけではなく、この会社の上役は皆知っているんだよ。」
心を読まれた気分だ。

「あの病気は、実はモンスターの卵を産み付けられたことによって発症したんだ。」

モンスター？なにそれ？そんなもの存在するの？

「存在する。調査隊はそのモンスターに殺害されたんだ。調査隊の目的は火山地帯の調査ではなく、モンスターの起源、卵を破壊しようとしたんだ。調査隊は原爆を持っていたんだが…」

「だが…？」

「現場を観に行ったとき、そのまま残されていた。つまり発射する前に殺されたのさ。火山で原爆が爆発しても何とか誤魔化せる。その前の問題だったわけよ。」

「どうして原爆なの？卵相手に大きすぎない？」

私の発言に彼はこう答えた。

「事前調査の段階で、巢にモンスターがいた。だから持っていた。」

「…」

「君の病気が治ったのもわが社がモンスターの調査をしていたからだ。この会社の医療活動は表向きで、本当の仕事はモンスターの撲滅だ。」

「説明ありがとうMacross君。今日ここに呼び出したの君達に頼みがあるからだ。」

社長の発言やバイブル

だな…

く挑戦く（後書き）

始めまして。連載始めました。
かたなと申します。

「刃の休日」のKATANAといえば分かる人もいるかもしれませ
ん。

初めてなので誤字脱字があると思うので
ご指摘お願いします。

11月1日編集

「そして「はんだー」」

「君達には今後発生する可能性のあるモンスターを狩ってもらいたい。」

「やめてください社長。冗談が過ぎます。」

「冗談も休み休み言ってくださいよ社長。荷が重過ぎます。Itx a r o p e n a はモンスターに卵を産み付けられた経験だつてあるのに…」Macross がそういった。

え、私のこと心配してくれてるの？ちよつと惚れ直した…

「心配してるに決まってるでしょ。君が死んだら俺の希望の火が消える。」

また心を読まれた…Macross は心が読めるのだろうか？とても不思議でたまらない。テレパスかな？その前に…メツチャ格好良いこといつてるよ。

「お、盛り上がってるね。君達はいいいペアになれる。そう信じてるよ」

反論も空しく社長は部屋を出て行った。社長の背広から、葉巻のいいにおいがした。何か懐かしい臭いだ。

翌日、「ぎるど(?)」からよく分からない通知が届いた。白い封筒に、青で紋章が書かれており、私の名前が書かれていた。しかも全部バスク語で書かれてる。名前がバスク語だからって、バスク語

はそこまで得意じゃないのに！

読み終わったところ、電話がかかってきた。Macrossからだ。

「ぎんど（？）とか言う所から通知が届いた。明日、雪山地帯の麓の国に集合らしい。いくか？」

「うん。いくよ！気合入れて行こうね！」そうして電話を切った。不安はあったが頼もしい彼氏、Macrossがいるから何とかなるであろう。その後身支度をし、翌日に備えた。

～翌日～

私たちの住む国から馬車で火山地帯を横切って4キロほど進んだ場所にある「雪山地帯」。雪山地帯は、通年雪に蔽われている。そのためろくに作物が育たない。しかし国人達の努力によりその地方特有の野草を調理する技術を編み出したりしている。

その雪山地帯に入ってから1キロ先にある「ポツケ村」に「ぎんど（？）」の集会所があるそうだ。集会場って、机が並んでいるイメージしかない。お菓子とか置いてあるのかな？

ポツケ村に着き、あたりを見ることが無く、すぐさま集会所と見られる場所に入った。寒かったからです。はい。

門をくぐって二人が目にした光景は…

くそして「はんたー」く（後書き）

ども。かたなです。「刃の休日」の更新に全力を注いでいたので小説の更新が遅くなったのです。ポツケ村のモデルはもちろんポツケ村です。

更新頑張りますのでまた宜しくです。

ゝ酒の臭いと鮭の臭いゝ（前書き）

門をくぐった二人が見た光景は…

く酒の臭いと鮭の臭いく

酒を飲んでいる叔父さんの集団だった。

すごいお酒の臭いがする。あと紅い魚が妙な臭いを出している。

「ここ…どこですか？」私…Itxaropenaが入り口入ってすぐのカウンター嬢に尋ねた。

「ココ？ギルドデス！コノヘンノクニノカリウドノタメノシュウカイジョデス！」

聴き取りにくいしゃべり方だなあ。そういえばMacross、ココに入ってから口を開いていない。寒くて唇が凍っちゃったのかな？冗談だけど。

Macrossを見ていて、後ろから来ていた耳のながーい女性に肩を叩かれたことに気づかなかった。「ポン！」と叩かれた瞬間

「うwああmkdadjp」

私は声にならない悲鳴を上げる。

酒場の人たちには聞こえていないようだった。

「こんにちは。私はギルド王国国王の娘、ココの管理者です。ゴメンネ驚かせちゃって（テへ）」

「申し訳ありません！あ、ココの管理者様でしたか。あの、ギルドからハンターへとか良くわからない通知が来たのでこちらに参りました。」Macrossが口を開いた。なんだ・・・しゃべれるんじゃないん。

「コチラに来ていただいたのは、貴方達に仕事をしてもらうためです。いわなくても分かりますよね？」私達はうなずいた。とりあえず頷いたけど、そうだったの？通知呼んでないからわからない。

「まずは適性試験を受けてもらうとしましょう。」偉い人が指をパチン！と指を鳴らすとリアカーで防具と武器が運ばれてきた。とてもリアカーでカウンターほどの大きさがあつた。その中に12種の武器とそのそばに1つポーチが置かれていた。

「この12種の中から好きな武器を選びなさい。」顔で語られた。しかも笑顔。

「防具はコレね」偉い人が「マフモフシリーズ」と書かれた箱を差し出した。

「防御は薄いけど、防寒性能が高いから、凍え死ぬことは無いわ」偉い人、大層な防具くれるあ。ん…？

「ていうかなんであの事故から日が短いのにこんなにハンターが？」Macrossの疑問に偉い人は、

「昔からブルファンゴとかイヤンクックとか、そういうモンスターはいたんだよ」

へー。モンスターの存在も知らなかったのに…

「あ、武器はそれでいいの？扱い方はポーチに入っているわ。訓練内容はドスギアノスの討伐。雪山までは直線だから道に迷わないはず。約10分で雪山まで行きなさい。それから50分以内に討伐すること！ポーチに絵を入れとくね。」

「はい！」

「ではいつてらっしゃい」

その言葉とともに偉い人は手を振った。

ゝ酒の臭いと鮭の臭いゝ（後書き）

人の区切り方がわからないので、面倒くさい文章になっています。
ごめんなさい。

くゆきやまに、でたふたりく（前書き）

私とMacrossは、取扱説明書と武器、ポーチを持ち雪山に出
発した。

彼女らは1本道を通っていたので迷うはずは無かった。

しかし…

くゆきやまに、でたふたりく

銃声と鈍器を叩きつける音がよく響く。

そんな二人の武器練習音が雪山通路に響く。

「これ、『チェインブリッツ』っていうんだ。通常弾LV1を速射できると。ポーチには火炎、電撃、ペイント、通常1、2と貫通、散弾、榴弾、拡散、毒、麻痺の1が相つていると。各1発多く入ってるんだくためし撃ちつと」

「この『アイアンストライク』、扱い易いな！」

この雰囲気ならハンターできるかも。と、彼女は思った。彼女の望む雰囲気は、一瞬にして崩れ去る。

「ズドン！！！！」

後方から大地震のような衝撃波が来た。ここはまだ通路なのでモンスターのはずは無い。しかし振り返るとそこには

「隊を壊滅させたモンスターだ…」

彼の言葉とともにそのモンスターが襲い掛かってきた。速い！

「ギウヤアアアアア！」

叫び声とともに突進してくるそのモンスターの名前は…

「ティガレックスだ！」

私たちは緊急回避でなんとかよける。ストライプ柄のボディ。鋭い牙と爪。強靱な尻尾。強力なモンスターにしか見えない。

「ギアアア！ガブ！ガブ！」

威嚇をしている。足が震えてきたが

「いくぞ！」

「うん！」彼の言葉で私の緊張と恐怖は消え去った。『ティガレックス』との戦闘が始まる！

先手を取ったのは私。焦がそうと思い火炎弾をリロードし発射。反動が少ないので間隔を空けずに打ち込めた。

狙ったのは弱そうな頭。2発打ち込む。奴はひるみもせず私に突進しようとしてくる。

「こつちだ！」彼が挑発して、気を引いてくれた。私は助かるが、彼が逆に危ない。

その隙に通常弾2をリロード。そして届く範囲にあった尻尾に打ち込む。しかし怯まない。

彼の方は見事に前足の間を潜り抜け、停まった瞬間溜め攻撃を叩き込む。コレでも怯まない。

その隙にも私は通常弾2をぶちこむ。そして装填している最後の弾

丸で奴が…

怯んだ。初めて怯んだ。この調子で。と通常弾2を再度リロードしまた撃ち易い尻尾に撃ちまくる。彼もその隙に頭に縦振りをぶちかます。

すると奴の血管の色が徐々に赤くなっていく。そしてバックステップした。直後に大きく息を吸い込み…

「グガアアアアア！！！！」

と吼えた。私は雄たけびの範囲外にいたので無事だったが、彼は近かったので耳を塞いでいる。しばらく動けそうに無い。遠くにいても耳が劈かれそうだ。

私は気を引くために全力で通常弾2を撃つ。しかし奴は怯まず、私の方に向き直し、さっきの2倍近くの速さで迫ってくる！

私は素早く納銃し全店。うまく攻撃範囲外に出た。今度は奴は彼の方を向く。

突進が始まり、硬直が解けた直後、辛うじて動けた彼は回避行動に出る。が、ギリギリ間に合わず攻撃が当たってしまい爪がかすった腕から紅い血が飛び出す。

「Macross！」私は呼びかけた。彼は起き上がる。そして奴は彼が起き上がった直後大きく1回転する。

その回転に彼は当たりそうなところを上手く回避したつもりだったが、尻尾に肩が当たる。そのままぶっ飛び背中を地面に打つ。

地面には雪が少しだが積もっていたので、背中の方は大した痛みではなさそうだ。肩の方からは血が出ている。
打撲の方がひどそうだった。

彼が弱っていることを悟った奴は彼に向かって止めを刺しに突進姿勢をとり、突進を始めた。

今度は確実に避けられない上に回避しても直撃は確定している。彼はあきらめたようにその場で硬直したままだった。しかし後数歩のところで、

「ぼくも混ぜて〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」という声とともに

奴はMacrossの真上をすっ飛んでいった。

奴の尻尾が切れたのだ。ということはほかに誰がいる？

私の真横に正体があった。

「ぼく、たちつかいのまるす。8さいだよ。」

その戦闘能力で8歳ですか？こえ。

奴が吹っ飛んだ隙に彼は回復薬で全身の代謝を促進させていた。

「助かった。マルス君」

「れいにはおよばない!」

その口調でかつこいいいこと言ってもかつこよく聞こえないよマルス君…

「さて、やるか！」

「おお！ー！」

彼女らは『マルス』を加え再び立ち上がった。

くゆきやまに、でたふたりく（後書き）

どもー。かたなです。

イキナリ敵がレックスという恐ろしい…

つまらない話ですががんばって読んでください

「マルス？スマブラかい？」（前書き）

（チヨイ書き方変えます。）

マルスに間一髪助けてもらった二人。

「マルス？スマブラかい？」

尻尾の切れた『ティガレックス』に3人で追撃をかけようとしたが、奴は飛んでいってしまった。

「畜生、逃したか」Macrossが悔しさを地面にぶつけた。

「これ以上戦うのは危険だよ。メインターゲットは……ドスギアノスだし。」私はポーチに入っていたクエスト確認書を見ていった。

「お。僕もだよ。3人で行けば余裕だよ。ちょっとまっててね。」

マルス君は携帯電話を取り出し、電話をかけると、

「今回は特別。おねえさんたち、これ以上疲れるのやでしょ。」空から飛行機が「ヴウウウウウウウウ」とプロペラ音を鳴らしながら降りてきた。

乗り込んだ瞬間私たちの口がしばらく開いたままになる。だって……だってまるで高級マンションの1室みたいなんだもん。

「しばらくベットで休みなよ。5分くらいだけどね」

お言葉に甘えてっ！早速寝ました。ごめんなさい。

ベットはとてもふかふかで、乗った瞬間眠くなった。とても甘い香りだし、心も身体も休まった。

本当に5分後、雪山の山頂、地図でいうエリア8に来ていた。

また「ヴウウウウウウウウ」と音を立てながら降りていく。降りた途端、隣のエリアから来たと見られる「ドスギアノス」に遭遇した。

「ぎゃあ。ぎゃあ。」とさっきのに比べるとスンゴク可愛い声で鳴いた。

私は余った火炎弾をリロードし、打ち込んだ。

Macrossがドスギアノスを気絶させ、マルス君と一緒に追撃をかけた。

私の火炎弾が気絶が解けた瞬間炸裂し、そのままドスギアノスは吹っ飛んでいった。

「やったあ！」マルス君の無邪気な声が雪山山頂に響き渡る。

「そういえばさっき斬ったティガレックスの尻尾はどうしたんだ？」Macrossの言葉に私ははっとした。せつかく斬ったのにはぎ取りしていない。もったいない…

「大丈夫。ヘリに乗せてある。さっき降ろした。一緒に剥ぎ取ろう。」

ドスギアノスと一緒に尻尾から剥ぎ取った。剥ぎ取りナイフって何でも切れる。

1分後にギルドから車みたいなのが来た。コレの乗り心地はアレに

比べると微妙だったけど。

酒場兼集会場につくとギルドの偉い人がすぐに迎えてくれた。

「報告があつたわ。ティガレックスと戦ったの？」

「はい。何とか撃退しました。」

「その上ドスギアノスもちやんと討伐してくるとは…ハンターの才能ありそうね。」

Macross、返り血にあつてゐるわよ。」

Macrossのマフモフを見ると、真つ赤に染まっている部分があつた。以外と綺麗なのがなんともいえない。

「マルス君どうだった？ほしいならお二人に差し上げるけど。」

「いただきます。」Macross即答。これで

「3人のパーティーになったわね。素材とかどうするか紙渡しとくね。では！」

若干男っぽいなあ。なんて思いながら後姿を見ると彼女はマルスと合流していた。

「あとつけてみない？」Macrossに提案してみた。

「マルス？スマブラかい？」（後書き）

この後マルス君の本性が明かされたりするのかも。

また駄作を…でもがんばって書いたのです！

いけないものをみてしまったよ（え（前書き）

「あとつけてみない？」MacrossにItxaropenaは
提案してみた。

あとをつけてみると…

（また文体変化してる）

いけないものをみてしまったよ（え

マルスとギルドの偉い人…睦音は集会所のカウンター横の扉へと入っていった。

個室のようになっていたようだった。

この後どうやって覗くかの話になり、とりあえず屋根に上り穴がないか探してみることにした。

誰にも気づかれぬように屋根に上ると煙突があった。その煙突は意外と集会所の広間ではなく、マルスたちが入っていた部屋の暖炉のものであった。

穴を覗くと掃除用なのか何かは分からないが、鉄製の梯子がかけてあった。

二人でゆっくり降りていくと、暖炉口は木の扉で封じられていた。しかし覗くには十分な隙間があった。部屋は生活必需品以外殆ど置いていなかった。

一人で寝るには大きいベッド。あとはタンス、食器棚、扇風機、本棚があるのみだった。

そして木の仕切りの隙間から、ベットのの上にいるマルスと睦音の声が聞こえる。

「今日もお疲れ様。はいウチケシの実。」睦音がマルスに何か木の実のようなものを渡す。そしてそれを口にした。

するとマルスの身体は成長し、青年剣士になった。どうやら薬かなにかで身体を一時的に小さくしていたようだ。理由は分からないが…

「今日噂の新人りと一緒に狩りをしてみてどうだった？結果、良かったじゃない。」

睦音がマルスに尋ねる。噂の新人りとは私たちのことかな？Itxaropenaは思った。

「二人ともお互い役割分担をしっかりとっていました。ティガと遭遇したとき、ピンチになったら助けに入るつもりですぐ準備していました。もっと早くダメになると思っていましたが一撃で切れるくらい尻尾はボロボロでしたし、奴にしては珍しく雪山でその後活動せずに砂漠へ飛んでいきましたから。」マルスが後をつけていることにItxaropenaたちは気付かなかった。

「ありがとうね。これからも二人をよろしくね。」と睦音が言うとベッドから部屋の扉に向かって歩き、鍵を閉めた。そのままタンスの前に行き、慣れた手つきで特徴的なドレスを脱ぎ始めた。

インナー…コットチョッキ姿になった睦音は、腕輪と手袋を取り、マルスの方を見る。

Itxaropena達が睦音に注目している間に、マルスはベットの傍で、豪快にレウスシリーズと見られる防具を脱ぎすて、インナーのマカライトブルーもまた豪快に脱ぎ捨てる。

睦音も胸の真ん中にあるボタンを外し、スカートを脱ぐ。美しいひだのついた桃色の下着が姿をみせる。背中に手を回し、下着を脱ぐ。

完全に現れた上半身には、幾つか傷があるが、その傷よりも美しい肌と括れ、そして大きく白く美しい双丘がとても目立つ。そのまま残った下着にも手をかけ…

♪ 作者から

ここからさきのご想像にお任せします。

以上♪

二人は煙突を脱出した。とても気まずい雰囲気の流れていた。なんせ、一線を越えている場面を間近で見ってしまったのだから。ふいに It x a r o p e n a が

「私達もあんなことするのかな？」と聞くものなので M a c r o s s は顔を赤らめて黙ってしまった。

いけないものをみてしまったよ（え（後書き）

今回の登場アイテム「ウチケシの実」はMHP3rdで登場するデス。

また駄作を書いてしまいました。

コレ、もうすぐ完結するかも。

今回はでもいいほうだと思う。。。。

何事にもつなぎ…（前書き）

いいわけです！

あ、面倒だからItxaropenaがホープになったり
カタカナでマーカスになったりするかもね。

何事にもつなぎ…

だれでもあのシーンを見れば、しばらく口を開くことはできないだろう（おい

二人は用意されていた木造の家に入った。

「私達もあんなことするのかな？」というItxaropenaの問いに、マーカスは答えられずにいた。

今日から、二人一緒に狩りをし、寝食を共にする大切な仲間である。もし、「あんなこと」をしたら、関係が崩れてしまうのではないか。と思うと、答えが出ない。

考え事をしたまま、暖炉に火を入れようと、火打石で着火しようとしたところ…

「あちいっ！」

マーカスの悲鳴が部屋に響き渡る。

「大丈夫!？」と、Itxaropenaがマーカスの方へ急いでくる。

後ろから火傷した手を診察され、ふとしたことに気づく。

ああ、Itxaropenaも自分の知らないうちにいろいろ成長

しているんだ。

胸だけの話ではない。15歳の冬、マーカスが暖炉の故障で火傷したとき彼女は「大丈夫！？大丈夫！？」と言いながらおどおどしているだけであつた。

しかし今回は違った。彼女は彼の手の火傷をしていない方の手を掴み、水道場に連れいていった。

冷水を部位にあて、「このままじつと冷やしていてね！絶対だよ！」といい、部屋へもどつていった。

しばらくすると、彼女は軟膏を彼の火傷の部位に塗った。

「後は買ってきたウチケシの実を飲むだけ。」

と、彼の口の中に入れてくれた。

彼は決断した。ちゃんと、ちゃんと自分の思っていることは言わないと。

「さっきの質問の答えを言いたい。」

Itxaropenaは、マーカスの方を向きなおす。

「俺は…俺は…やってもいいと思う…いや、いつか、や、」

マーカスはItxaropenaに抱きつかれ、言葉をさえぎられた。

「ありがとう。これからも宜しくね!」

マーカスはしばらく彼女の笑顔を見つめてしまった。

何事にもつなぎ…（後書き）

モンハン！モンハン！

今回は完全につなぎです。

リアルの方で3rdやっとするので更新がねえ…

ハンバーグポNDERリングゲロアルドロス（前書き）

グルメ紀行とかいいよね・・・

ハンバーグボンディングロアルドス

Itxaropenaとマーカスは、そのままべつとに二人で入った。

わけないです。

「昼食をとつたらすぐに集会所に集合。」と、ギルドマスターからの伝言が、3000Zとともに家のテーブルの上においてあったのだ。

部屋にいた猫？に、料理のメニューを渡されたので、その中にある「キングターキー」と、「シモフリトマト」をItxaropenaは選び、マーカスは「幻獣チーズ」と「黄金芋酒」を選んだ。

「お二人さん、ご入居サービスニヤ。明日からは自分で何とかしてくれニヤ。」と、あの猫にいわれた。

「ネコさん、名前は??」と、Itxaropenaが聞いてみると、

「猫と言うかアイルーニヤ。チャイムニヤ。近くで定食屋営んでるニヤ。場所はこの家の暖簾をくぐったところニヤ。」

食堂常備の家です。

（場面転換！）

昼食を食べ、集会所に集合したItxaropenaら2人と、^{ギルド}睦

音とマルス。

マルスを見ると、青年剣士の姿であった。

困惑している Itxaropena を前に、睦音が口を開いた。

「貴方達、マルスの今朝の姿、偽者ってことが分かってるわよね。覗いてるの、バレバレだったわよ。まあ貴方達にああいうことのお手本を見せたって行っても良いかも。」

二人の覗きはばれていたようである。それを余裕で許すギルドマスターの心の広さも良くわかる。

「今の彼が本物の彼よ。ちょっと面白い薬を飲ませただけ。で、あなたたち、ああいうことのやり方わかった？ また見せるわよ？」

「いいいいえ、わかりました…多分…」

ハンバーグポNDERINGグローバルロス（後書き）

更新できない分いま全力でやってるわけ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1861o/>

Great Adventure

2011年10月8日02時43分発行